

教養の成立を再考する

——谷川徹三の内面的成長史を中心に——

張 鈴

はじめに——教養の成立について、筒井清忠説への疑問

教養および修養^①については、唐木順三の『現代史への試み』をはじめ、多くの研究業績がある。筒井清忠は『日本型「教養」の行方』の冒頭で、教養の成立のプレリユードとして明治末期の修養ブームに触れ、明治末期にアノミー状況から脱するべく「共通の解決の方向性」(傍点、引用者)^②を持つ修養が青年たちの個人およびグループの間で生まれたと分析し、大正期の学歴エリートを中心とした「教養主義」と大衆文化としての「修養主義」は「明治後期に「修養主義」として同時に同一物として成立した」(傍点、引用者)^③と説いている。後来の多くの研究は、特に教養の成立や教養と明治期の修養ブームとの関係について、筒井の説を受け継いでいる。

しかし、筒井の説にはいくつかさらなる検討を加える必要があると思われる。一つは、筒井が修養の学校教育における側面を見逃したことである。修養は少なくとも、修養書籍、学校教育と宗教関係者が主導する思想運動という三つの側面に分けることができ、それぞれの側面に対する研究は、修養の性質、すなわち個人による(自律)と国家による(他律)の拮抗関係について異なる結論を導くのである^④。もう一つは、「大正教養主義は明治後期の修養主義から出立した^⑤」という教養の成立の説明である。筒井は、阿部次郎や安倍能成らと先輩の魚住折蘆との影響関係を指摘し、さらに折蘆の思想のルーツを修養の思想運動家の西田天香、綱島梁川にまで遡り、それによって前に引用したような判断を下した。しかし、魚住折蘆はかつて「僕の受けた個人の感化は内村先生を第一に置き、次は柴崎嬢である、第三は綱島先生である。第四は安倍、阿部、小山、宮本

の諸君——高出身のサークル——である（これは皆年代順にならべて二と云ふのである）⁶と述べている。その回想からすれば、折蘆と、後に教養主義者と呼ばれるようになった安倍らとの間の思想的影響関係は、一方的なものとは言い切れないのである。また、筒井は、アノミー的情况が煩悶青年や墮落青年などの現象を生み出し、このような「アノミー的な状況打開のため」⁷に修養運動が起こったと見ている。だが、はたして煩悶青年と修養は単純な乗り越える／乗り越えられる関係なのだろうか。

小論は、以上に見てきたような問題を抱えている筒井の論を破棄し、教養の成立を修養と煩悶青年との関わりを考えた上で見つめ直すようにしている。ここで看過してはいけないのは、明治末期の個人主義の台頭である。煩悶青年や墮落青年が明治末期の個人主義の受容と関わりがあることは、川口さつさらの研究において指摘されている。⁸加えて、修養は、自己形成を目指すということにおいて教養と一致し、自我に対する意識の芽生えは個人主義の影響だと考えられる。個人主義の受容という視座から、煩悶青年、修養と教養の形成および相互関係を洗い直す必要があるが、いままでの研究では、修養をめぐる研究においても、教養をめぐる研究においても、煩悶青年は周辺の存在であった。大正期に浮上する教養は、日露戦争前後に話題になった煩悶青年とは無関係のように見えるのだが、青年の煩悶という現象は大正期にも引き続き見られ、加えて、明治末

期に「人格の修養（以下で論証するが、これは当時形成されつつあった教養である。以下は〈教養〉で記す）」という自我形成の手段が生じつつあり、修養・〈教養〉・煩悶青年は時間的に、十年程度の重なりがあるのである。

小論では、哲学者・教養主義者の谷川徹三（一八九五～一九八九）を取り上げる。谷川徹三は明治末期に中等教育を受け、一九一三年三月に旧制愛知県立第五中学（現愛知県立瑞陵高等学校）を卒業し、旧制第一高等学校に入学した。一九一八年までの五年にわたって一高に籍を置き、その後、京都大学で西田幾多郎に学んだ。卒業後は同志社大学、後に法政大学で教鞭をとりながら、文学・時勢・美術・思想など多くの領域で評論を執筆していた。戦後は世界政府の支持者として、また茶道や美学の評論でも注目された。彼は「親鸞・ホイットマン・ゲーテなどの影響を受け、また阿部次郎・安倍能成・小宮豊隆・寺田寅彦・野上豊一郎・和辻哲郎らの漱石山脈に近く位置づけられる。阿部・和辻ら漱石門下と同じく教養主義に立」⁹ち、「哲学的教養者」で、「啓蒙家」といわれる。彼は一九三〇年代、教養について議論し始め、和辻哲郎、阿部次郎、安倍能成と同様に教養主義の提唱者となり、修養・〈教養〉に培われた教養主義者であるともいえる。

谷川徹三は一九一〇年代初頭に煩悶し、修養運動によっては煩悶から解脱することができず、〈教養〉によって立ち直った。五年に

わたって一高に籍を置いた谷川徹三が経験した苦悶は、学校教育と密着した修養、一高という場で覚醒した〈個〉と深い関わりを持ち、煩悶青年の代表者ともいえる藤村操のそれと通底するところがあると考えられる。藤村操は「人生不可解」という言葉を残して投身自殺したが、〈教養〉を通して自己を成長させた谷川徹三は煩悶と自殺の危機から逃れた。谷川徹三は修養・〈教養〉・煩悶という三つの要素に深い関わりがあり、学校教育・思想運動・修養書籍という修養の三つの面を考察することが可能であるため、表題のテーマを考察するのによい素材だと考えられる。この考察は、文化、文学諸分野で評論活動を展開していた谷川徹三を研究する基盤にもなる。

小論は具体的には、谷川の内面的成長史を、修養に勉めた中学校時代、自殺危機と煩悶の時期にあたる旧制第一高等学校入学前後、転機となった一高在学中という、三つに区分して、修養や〈教養〉の性質を検証する。さらに谷川の一高の先輩であり、煩悶青年・修養・〈教養〉に関わっている藤村操、阿部次郎、安倍能成、折蘆魚住影雄、藤原正らの言説を補助資料として用い、煩悶青年と修養に努めた人々や、後に教養主義者と呼ばれる人々の思想的近縁性を検討する。〈教養〉によって内面的な成長を遂げた谷川の過程を分析することにより、大正初期の旧制高校における「読書による自己形成」^⑩、すなわち教養の成立を再考してみる。

一、修養の時代

谷川徹三が中学三年生（一九一〇年）の時に書いた作文集「夏期休暇宿題 五十の日子」^⑪（未刊行、以下「五十の日子」という）が残されている。この作文集は、谷川の中学生の夏休みの生活を記録している。そこには、修養という言葉が合わせて四カ所に現れ、そのなかの一カ所は、一篇の作文のタイトルとなっている。

作文集を見れば、若き谷川徹三が読書に努めていたことは明らかである。「作文自修宝鑑は作文自修の好書籍。格言処生訓は品性修養に資すべく、西国立志編を読んで、発憤せざるは人にあらじと感じぬ、維新百傑・橋本左内共に英雄の言行を知つて、修養のたすけたらんと思ひたり」（「読書」）。そこには、積極的な読書によって人格の向上に努めようとする若き谷川の姿勢が示されている。『西国立志編』『格言処生訓』は、当時広く読まれた修養書だった。

谷川の作文には規範が多く存在する。「健全なる精神は、健康なる身体に宿るものを。身体髪膚敢えて毀傷せざるが孝の始めなる」（「病氣」）。東西の名言を並べた、体を大事にすべきだという規範である。「学問の目的は徳性修養にあり、学は末なり。品性は本なり。（中略）成績下りしを憂ふべからず。己の品性下劣なるを憂ふべし、然り」（「いろいろ」）。学問より品性を重視すべきだという儒教的

な規範である。ほかに、規律正しく生活を送るべきだ、日記を付けるべきだといった規範が見られる。以上は、当時の人間形成にとって基本的な規範であり、若い学生にとっては普遍的な価値だったともいえるだろう。要するに、若き谷川は、規範に囲まれていた。彼らはこれらの規範に抵抗せず、逆に、それらの規範を彼の自己反省のモデルとすることにより、自己反省の習慣を身に付けた。次の引用は彼の自己反省の思考回路を説明するものである。

愉快に暮さんこの夏季の、予が希望は自分乍ら多少難しと思ひき。然れどもかく迄とは思はざりき。宿題に追はれんとは、思はざりき。之も諸先生の教を守らず、規則正しき生活をせざりし為ならんと、考ふれば今更乍らその非をはぢぬ。

何故、余は時間表を作りて之を踐まざりしならんか。規則正しく暮さざりしならんか。もし規律正しく暮せしならんにも、臍をかむ事もなかりけん。我心怠惰心に駆られて、良と信じ乍ら之を行ふ事能ず、余は己の意志薄弱なるを痛切に感じぬ。感ずると共に、一層の修養を要するを自覺しぬ。自覺すると共に、万難を排して奮励一番せんと決心しぬ。かく決心すれば心の中何となく爽に、憑は去つて元氣は入りぬ。腕は鳴りぬ（「勉強」、傍点は引用者）。

作文というよりむしろ反省文のように見える上記の引用は、若き谷川の思考回路を示す。まず、スケジュールに従って生活すべきだという規範がある。彼は規範と照らし合わせ、規範に合致しない部分があれば、すぐさま己を責めて非常に悔しがった。この悔しさから逃れるために、さらなる修養に努める決意を固めることによって、当時の彼は慰められたと感じた。若き谷川は主に自己反省という手段を用いて自我形成に努めた。彼の一日は、下の引用のように始まり、そして終わる。

朝起きし時、夜寝に就く時、在舎の頃は皇居と、父母の坐ませる方を伏し拝みて、今日の事を追憶せしが、この五十日間佛壇の先祖を拝し、宮城と己の学ぶ学校を遙拝して、一日を追憶し、以て反省に供しぬ。

日誌は記して文を錬り、又反省に供するもの（「修養」）。

日記をつけて一日を振り返り反省することは、曾子の「われ日にみたびわが身をかえりみる」（論語・学而篇）を想起させる。偉人曾子の行動までも、学ぶべき内容、すなわち規範になっている。ところで、日記を付けることは、谷川の一生の習慣になる。

唐木順三は『現代史への試み』で、修養を前近代的な修行と同じものとし、両者には、「典型の存すること、生活と行為に関するこ

と」という共通点があると述べている。その上で、修養は「四書五経が則るべき經典であり、君子、大丈夫になることが理想であつた¹²⁾」と主張し、体系を持つ「礼」を「型」の例として、「思惟体系」「生活体系」を規制する型の喪失を嘆いている。「近代の〈修養〉は「型」を持つ近代の〈修養〉と同じだ」という結論を導き出した¹³⁾ため、唐木の論は後年の研究者によって批判された。近代に入つて、東西の知恵を広く受け入れた日本には、確かに体系を持った思想が見られない。しかし、これらの断片的な知恵は、大衆の行為を自律させるようなもので、その集まりがようやく、ひと揃いの規範・「型」となった。「型」が再建されたならば、唐木の「典型の存すること、生活と行為に関すること」という指摘は、まだ有効だと考えられる。修養というものは、自己形成の意志と結びつき、他律的な規範を自律的なものに転化させるメカニズムであり、そしてそのメカニズム自体は、疑いを差し挟む余地のない大きな規範として存在している。谷川が中学校時期に取り込んだ修養は、規範のなかの規範として、谷川の思考回路を規定した。すなわち、規範自体を批判せず、規範と照らし合わせて、自己改善を求めるという回路である。若き谷川の激しい自己否定の精神と、修養という大きな規範を疑うことなく内面化する傾向がこれらの作文に散見される。

二、谷川の煩悶

谷川徹三の人生の危機は、中学五年生（一九二二年）の性の覚醒によつて幕を開ける。『自伝抄』によれば、中学四年生になると、背が急速に伸び、そして五年生になると急に性を意識するようになり、ついにマスターベーションの習慣を持つようになった。一高に入ると好きな人ができるが、告白できず谷川は恋煩いする。当時について、谷川は「それでまた自慰をして自己嫌悪におちいる」と回想している。マスターベーションがもたらしたのは、「罪の意識と言つても、きたないという思いと結びついたやましさの感情¹⁴⁾」であった。この自責の念と自己嫌悪は次第に、自らの生に対する疑問という大きな哲学の問題に変わりつつあった。谷川は『第一高等学校 校友会雑誌』（以下、『校友会雑誌』と略す）に、自らの煩悶を投影した短歌を寄稿した。「わがはたちまはだかにしてふき狂ふ風のなかを走れるごとし／かくてわがはたちの年もすぎなんとふるさとの海にものおもへり／とこしへに覚めざるわれとおもへどもあかつきこそは祈りもすなる¹⁵⁾」。「まはだかにしてふき狂ふ風のなかを走れる」というイメージからは、冷たい、絶望感がじわじわと伝わってくる。

青年谷川の人生の危機は次のように要約してもよいだろう。汚いと思いつつ、マスターベーションがやめられず、自らの意識の弱さを

感じ、自己嫌悪に陥る。そこから〈自己〉に対する意識が自己嫌悪の念と同時に生まれ、自己嫌悪が次第に自己否定ひいては内面的な煩惱に転じた。

修養は規範として、人々にそれらに適應することを要請する。修養に努めれば努めるほど、規範が多くなり、自己に対して不満を抱く可能性も高くなるということを、若き谷川は意識せず、マスターベーションをしてはいけないという規範（以下は略して「有害論」という）を疑いもなく受け入れた。マスターベーションという行為はほかの「悪習」と比べて、特異性がある。作文「勉強」に述べられたように、規則正しい生活を送らなかつた場合、谷川は自らの怠惰と意志の弱さを責め、今度こそはと決心をつけることで、自己否定から抜け出すことができた。それに対して、マスターベーションをやめることは、同時代の作家武者小路実篤が自伝的な長編小説で告白したように、「くりかへされてやむことのない、又絶望し切らない戦いの連続」¹⁸だった。やむことのない性欲との戦いの結果として、若き谷川が自らの意志の弱さばかりを感じ、自己嫌悪・自己否定に陥つたであろうことは想像に難くない。

「有害論」そのものにスポットライトをあててみる。近代以前の漢字文化圏において、マスターベーションは特に問題にされなかつた¹⁹が、明治時代に入ってそれを禁物と見なす西洋の規範を受け入れた日本では、「有害論」が「日本の民衆にとつても、ある程度まで馴

染み深い、つまり既知に属する知識」²⁰となった。初期「有害論」は、マスターベーションを禁止する理由を道徳や理性と結び付けた、個人のレベルの規範である。しかし、明治末期に至ると、「有害論」は、「マスターベーションをする」と立身出世ができず、国家に貢献できない。故にマスターベーションをしてはいけない」という論理で、国家と結びついた議論になった。このように、外部の規範を参照して個人を自律しようとする欲望は、国家が個人の性をコントロールしようとする欲望に接続された。宮川透や木本至、赤川学がすでに指摘したように、「修養思想は（中略）国家権力が上から他律的に課した禁欲倫理を、内面的自律的なものに転換するという形で、客観的には忠良なる臣民の形成という役割を演じた」²¹。このことは、この立身出世論と結びついた「有害論」にもあてはまる。立身出世論は国家権力と個人による自律の要求を繋いだ²²。一方、谷川は、一高生になった時点で明るい未来が見え、出世がほぼ保証されている。つまり国家に貢献できないからマスターベーションをしてはいけない、という個人と国家のつながりが切断され、言い換えれば、立身出世論と結びついた「有害論」の有効性は谷川にとつて意味を持たなかつた。谷川徹三は、あくまでも個人レベルの初期「有害論」に留まっており、彼の性は国家の管理から逸脱した。性をめぐる悩みが、谷川の〈自我〉すなわち己の内心へ向かうようになったきっかけがある。

谷川の性欲と自律という葛藤から生まれた煩惱は、第一高等学校という場と深い関係がある。自己反省によってのみ自己の改善を図るといふ修養が彼の思考回路を規定したとすれば、一高という場が、彼の悩みの行方（膨らませ方）を規定したともいえる。マスタベーションをしたら立身出世ができないという規範から解放され、一高生として出世がほぼ保証されていたが、彼は初期「有害論」を絶えず照合することによって自己嫌悪から抜け出せず、ついに自殺を考えるようになったのである。一九二〇年代に書かれたある一高生活を主題とした修養書は、一高生を「深く人生観的思索を辿った」と高く評価する一方で、他の青年については「出世することよりに何も考へなかった」と批判したが、その論理が転倒したのである。一高生（あるいはほかの旧制高校の学生）になり、出世がほぼ保証されたと感じるがゆえに、青年は人生を考える自由とゆとりを手に入れたのである。個人主義受容の最先端である第一高等学校という場は、立身出世論と国家から解放された自由そのものを提供しながら、自由のもたらした苦悩を煩悶にまで発酵させるゆとりを提供する。谷川が通常より二年長く一高に在学し、「ほとんど学校へ出ないで」、「東京へ帰るとしばらくは毎日、図書館へ閉じこもった⁽²⁵⁾」することが許されるのは学校の寛容であり、逆に言えば、学生に与えられた（ゆとり）を裏付ける。

三、個人主義の受容と煩悶青年

恋煩いをし、「自慰をして自己嫌悪におちいる」若き谷川は、急に自己意識が強くなり、「煩悶青年で意気消沈⁽²⁶⁾」していた。苦悩に満ちた生活をどのようにして積極的に肯定するかという点は、谷川にとって哲学的問題になる。（自我）を追究するという点において、谷川は九年先輩の藤村操と、通底する苦悩を抱いていたと思われる。内面的な悩みを抱え、人生の問題を考え続けた結果、自らの命を絶った藤村操は煩悶青年の代表として広く知られており、徳富蘇峰によって「失恋したるかために、滝壺に陥りて自殺したる徒の如きは、煩悶期の初期に属する者に過ぎざる也⁽²⁷⁾」と決めつけられたが、操は個人主義の時代への転換をいち早く意識した、煩悶青年の先覚者だと筆者は考えている。煩悶青年の内面的な悩み、人生の問題の生起は、個人主義の受容がもたらした個の覚醒と分けて考えにくいのである。次に、操の遺書に関わった個人主義論争の言説を整理する。

藤村操の自殺の前後に、個人主義を受け入れるべきか否かをめぐって、青年たちは『校友会雑誌』の紙面において論議した。特に操が自殺した後の一九〇四、一九〇五年、魚住折蘆、安倍能成、阿部次郎らが個人主義の旗を掲げ、それまでの第一高等学校の校風で

ある籠城主義と対峙する姿勢を示す。籠城主義とは、「謹儉尚武」の価値を高揚し、学校以外の社会を濁世としてけなす考え方である。一方、個人主義は、「自我の発展、自己理性の満足」を目的とする見地である。折蘆は、「真正の意義に於ける向上主義と博愛主義とは、亦此の個人主義より出でし者なりとす」、「自己理性の発展、之を度外視して人世の要義何処にか存せむ」と説いた。後に人格主義を唱えて青年をリードする阿部次郎は、「父母は仏陀の実在と来世の賞罰とを教へたれども我等は抑も何の処に仏陀の実在を見、何の故を以て来世の賞罰を信すべきか。教師は忠孝が唯一絶対の徳なるを教へたれども、我は子をして其父に反かしめ妻をして其夫に逆かしめんがために来れりといふ峻烈な宣言をなす人の子あるを如何すべきや、是等の両説は孰れか是非なる、此等の是非を判別するに吾人は何等の標準によるべきぞや」と叫び、宗教、国家の価値観を疑い、新たに〈個人〉を中心とする価値観を示した。当時在学していた安倍能成は阿部次郎の論説に賛成の意を示し、阿部次郎の態度を「個人的修養の上に自己安住の地を求めんとする」ものとまとめた。また、安倍能成は「個人主義を論ず」を発表し、「個人の存在を自覚し、個人の判断に従ひ、個人の真相を闡明し、個人の価値と威厳とを認識して之を主張し、以て個人の発展を勉む」という意味の〈个人中心主義³⁶〉を唱えている。彼は、個人主義が〈個〉の覚醒に基づくことを次のように論じる。

個人主義の起点は、竟に我が存在の自覚に基せざる可らず。我が存在の自覚なくば、我れ無しといふも可なり。己に我れ無し。個人主義は何によりて立たんや。³⁷

自芽^{マユ}の萌芽は、更に進んで自己存在の自覚となる。³⁸

個人主義は個人の権能を主張す。然らば個人とは何ぞや。我れは果してこの権能の主張に堪へ得るや。嗚呼「我れ（個人）とは何ぞや」、これ最も陳くして而かも常に最も新しき問題なり。世に之より大なる問題なく、之より困難なる問題なし。されど是れ実に我等が焦眉の問題にして、又永続の問題なり。「我れとは何ぞや」、是れあらゆる疑問の中心なり、根本なり。³⁹

藤村操の自死は、まさに自らの存在に対する自覚の結果としての絶望である。操の遺言の全文を次に引用する。

悠々たる哉天壤、遑々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。ホレーシヨの哲学竟に何等のオソソリチーを備するものぞ。万有の真相は唯一言にして悉す、日く「不可解。」我この恨を懐いて煩悶終に死を決す。既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。始めて知る大いなる悲観は大いなる

樂觀に一致するを。⁴⁰

藤村操は、時間・空間の広大さに圧倒され、自己の存在を「五尺の小軀」として表現している。言い換えれば、操は自己に対する自覚、世界に対する意識を持っている。「万有の真相」を求めようとしたが、その結論は「不可解」だった。「不可解」しか、操を納得させられなかったのである。このようにして、操は死を選んだ。不可解や死は悲観論だとよく思われるが、それこそが真理である以上、真理を手に入れたと操は楽観的に思ったのである。藤村操が死を通して求めたのは、安倍能成が「我れとは何ぞや」と問いかけ、個人主義を論じて求めたものと、同様のものであることがわかる。

藤村操の死は、社会から国に必要な人材が失われたといった批判を浴びたが、一高の同窓は彼に理解を示している。魚住折蘆は、「僕の曩日の苦痛は藤村君の外に知りうるものなく、藤村君の死んだ心は僕の外に察しうるものはないといふ様な感がした。又藤村君は至誠真摯であつたから死に、僕は真面目が足りなかつたから自殺し得なんだのだと思つた⁴¹」と、彼の死を肯定的に取り上げた。そして、安倍能成は、操が『宇宙の大本、人生の根本義』の解釈に煩悶し、懊惱遂に死に至る⁴²、「この真境地を知らんものは唯君ならんのみ⁴³」と、「我れとは何ぞや」の答えを追求することにおいて、親友の死を高く評価している。要するに、当時の一高の学生は、操の

自殺を真剣に人生を考えた上の主体的な選択として受け止めた⁴⁴。その理由は、同時期の彼らが操と同様に煩悶し、自己形成への道を積極的に探っていたからだと考えられる。換言すれば、個人主義の受容で自我に対する意識が生じ、その結果として、後の教養主義者も含めた青年がみな煩悶し、それぞれ脱出の方法を考えていたのである。

谷川徹三の煩悶の引き金は恋煩いと「有害論」で、藤村のそれとは異なるかもしれないが、⁴⁵国家管理から逸脱した〈性〉をきっかけにして〈個〉が覚醒し、結局煩悶と人生に対する哲学的な思考に導かれたことは、藤村操と同様である。操は「不可解」と死で納得したが、谷川は生への強い意志を持ち、絶えず〈死〉以外の答えを探していた。煩悶青年谷川徹三は立ち直るために、漂泊の旅に出たり、北海道の鉾山町まで行ったり、百姓になろうとしたりしていた。百姓になり農業労働に取り組むのは、当時の修養団によくあった。さらに、彼は生活を一新するために、一時仏教修養運動のリーダーである近角常観の求道学舎に入っていた。求道学舎にいる日々を振り返り、谷川は次のように語る。「求道学舎の生活は朝夕仏前で正信偈と阿弥陀経を誦する勤行以外には別にほかと変わりはなかつた。(中略、引用者注)私の信仰はいっこう進まなかつた⁴⁶。「その頃、絶えず私の念頭を去来したのは、「正信偈」の中の一句、能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃であつた。が、その喜愛心を発することが私

にはいつまでたってもできなかった。信仰のきびしいディアレクティークに私の心は耐えられなかったのである⁽⁴⁷⁾。求道によって新しい出発を求めたが、結局失敗したことは象徴的である。近角常観は〈修養〉の流れを汲む仏教思想家で、「仏」がひとつの「人格」として自己に迫ってくることで、人間は知的で道徳な生き方を選び取れるようになる⁽⁴⁸⁾というのが彼の修養思想の中核といわれる。近角常観は規範を与えず、念仏勤行による人間の自己形成を待望するが、若き谷川にとっては、自己形成に必要な知恵が得られず、ゆえに救いにならなかった。信仰が進まない、すなわち、まさに修養に努めることによって救いを求めることに失敗したのである。煩悶青年谷川徹三は他に救いを求めなければならない。しかし、規範を与えないことからすれば、近角常観の修養概念は、当時形成されつつあった教養と近接しているのである。

四、転機

谷川徹三は求道学舎にいる間も読書を続け、本屋で偶然ホイットマンの英語版『草の葉』を入手した。『草の葉』との出会いは、谷川の人生にとって大きな転機となった。谷川徹三は多くの回想文において、『草の葉』が肯定の風を吹き込んだことに触れている。ホイットマンは「一切の存在を肯定し抱擁する博大な心によつて、熱

情に溢れたその表現によつて、大波のうねりをもつたその力強いリズムによつて、私の中に生命の息吹きを吹き込んでくれた⁽⁴⁹⁾。「私は特に意気消沈した折などには、その詩の一節を、さういふ場合には『大道の歌』などが最もよかつたが、声をあげて読んだ⁽⁵⁰⁾」。

リンカーンに捧げた「リンカーン大統領の追憶」は、谷川の好きな詩である。高校生向けのホイットマン紹介（二九五六年）において、谷川は自らの理解を若い読者に説明する。この詩はリンカーンの死を追悼し、やがてその「死から離れて、多くの人達の死を、そして死そのものを歌い始める」。「彼にとつて死も生も一つのものなのだ⁽⁵¹⁾」。「死も生も一つのもの」という考えは、藤村操の「大いなる悲観は大いなる楽観に一致する」という悟り、後に谷川自身が書く、「虚無思想と名づくべきものは皆相対的のものにすぎない。それはある一つの肯定の強調である⁽⁵²⁾」という考えに繋がっているのである。

谷川の好きなホイットマンの詩としては、ほかに「ぼく自身の歌」（または「自我の歌」と訳される）がある。ホイットマンの「自己の中には世界があり、世界はすべて自己の表現⁽⁵³⁾」という世界観がこの詩に頻繁に現れる。藤村は「五尺の小軀」をもって「万有の真相」を求めようとしたが、最終的に「不可解」に帰結した。それに対して、ホイットマンは個人と世界の関係について、自己すなわち世界という独特の解答を谷川に提供した。それに、この『草の葉』に収められた代表的な詩には「マスタベーションがやはり強烈に、

もつと個人的な形で暗示されている」と、デビッド・フリードマンが指摘している。⁵⁴ ホイットマンの詩に溢れる肉体と性（特にマスターベーション）そして生の肯定は、恋煩いと「有害論」に悩まされていた青年谷川にとつて、一種の救いだったと考えられる。

谷川は、最初一人で『草の葉』を読んでいたが、一九一七年に八木澤善次と市河彦太郎につれられて有島武郎が主宰した「草の葉会」に行き、以来、熱心なメンバーになった。「草の葉会」は、八木澤と市河ら一高や東京帝大の学生が有島武郎を囲んで『草の葉』を読むプライベート色の強い会合で、「初め一時間か一時間半、『草の葉』を先生に読んで訳してもらって、あとは自由な放談をする」⁵⁵。後半になると、「文学の話、美術の話、政治の話、歴史の話、哲学の話、相当話題は広がった」⁵⁶。『草の葉』をきっかけに、谷川は有島武郎に親炙した。

「草の葉会」で、有島は自らのホイットマン論を敷衍した。谷川の心に残された有島の言葉に、「人間は頭だけ先へどんなに進んでも精神の諸能力がそれに伴はなければ駄目であるが、社会についても同じことが言へる」⁵⁷という一句がある。それは、有島武郎の「草の葉——ホイットマンに関する考察」における、「何故魂だけを後ろに残して、物皆なは噪いだ走り競べをしようとするのか」⁵⁸という嘆きと、同じことを言っているのではないかと思われる。

谷川の回想によると、「親鸞、ホイットマンによって、私をいつ

も深淵の前に立たせていた否定の精神からやつと脱していたとはいえない、私の中にはまだ積極的に大きく人生を肯定する気持ちは育っていなかった。同じころにニーチェを読んでそういう気持ちへの鼓舞は受けていたけれど、まだどうにもならないものが心の奥にあったのだ。それがゲートルを知って気持ちが大きく動いてきたのである」⁵⁹。文学書や哲学書の読破と著名な師に親炙することによって、谷川の自己否定の衝動が緩和された。恋煩いとマスターベーションが招いた自己嫌悪から脱却するための読書は、人生に関する思考、より正確に言えば〈死〉に関する思考に移行しつつあった。彼の思考は、一九一七年の「否定・肯定」⁶⁰という論文に凝縮される。一高の英法科に入学した谷川が父親の望む法学に進学せず、哲学を選んだのも、彼が哲学の思考に相当進んでいたためと考えられる。

五、否定から肯定へ

「否定・肯定」は、谷川が一高を卒業する前の年の一九一七年に本名で『校友会雑誌』に掲載された論文で、同雑誌における一高生谷川の最後の寄稿であった。そして、それは、『校友会雑誌』の数多い評論の中でも最も高い水準に達している」⁶²と高く評価された。本名を使ったのは、過去と切り離し、未来に向かって再出発する意図が込められていたと、後に谷川自身が語っている。

この論文で谷川は、ベルクソンの『創造的進化』にある肯定と否定に関する論述から、否定を経えない肯定は本当の肯定ではないという論文の基本的な観点を引き出し、ゲーテの一切を肯定する気概を以て、あえて厭世観・虚無観を肯定し、厭世観・虚無観から意義と価値を発見しようとした。彼はショーペンハウアーの厭世論をひっくり返して読み、「不満と缺乏とがないならば世に活動と進展はない」（八頁）と主張する。そして、フリードリヒ・パウルゼンの厭世観を四つの部分に分けてそれぞれ反論し、「厭世は要するに各個人の感情にすぎない」と判断する。また、ゲーテの名言をドイツ語で引用し、「物自体は不可知である」ことを肯定すると同時に、「かかる事実を決して我々をして現世を厭離せしむる原因ではない」（二一頁）と宣言する。ツルゲーネフ、フロベール、アナトール・フランスなどの芸術家の虚無思想にも少し触れてから、最後の結論に到達する。「虚無思想と名づくべきものは皆相対的のものにすぎない。それはある一つの肯定の強調である」（一六頁）。谷川は「否定・肯定」で、彼が一高在学中に生と死に関する思想家の論説を読み漁った成果を示し、彼自身にある「懐疑的思想並びに虚無的享楽思想」を克服するために、ベルクソン、カント、ゲーテなどの生命肯定論者とショーペンハウアー、フリードリヒ・パウルゼンなどの厭世家を対峙させ、生命肯定論で厭世論を是認しようとした。この論文には、「しなければならぬ」というフレーズの多用が目立つ。

たとえば、谷川は「我々は人生の意義と価値とを認めなければならぬ。そして現世を肯定しなければならぬ」（二一頁）と述べる。押し付けられた人生の意義や価値を肯定するように聞こえるかもしれないが、この表現は、ゲーテが好んで使ったドイツ語 *nutzen*（しなければならぬ）の翻訳調の模倣だと考えられる。

「否定・肯定」は次のように結ばれている。「これは私が今迄の懷疑からのがれ出た状態であり思惟過程であるゆえに私の体験であり思索である。そして信仰である。この私の信仰が何処に矛盾があるにしても私の体験であるゆえに私はたうとい。そしてその時私は中期の神学者にならつて斯ういつてもいい「矛盾せるゆえに私は信ずるのだ」（一九頁）。その時谷川は厭世観を持つ彼自身だけにではなく、谷川と似たような虚無感を抱く青年に対しても、このように宣言したのである。

青年谷川徹三が一高在学中に体験した、読書による思考遍歴は、規範がアプリアリ的に存在し、その規範との照合によって自己改造に努めるという学校教育と、修養書の閲覧を主な内容とする修養の過程との明らかな相違を示す。目標・模範が存在する修養と異なつて、特定した自我の像を持たずに、主体的に諸国の文化的修養を吸収して人格を形作る過程は、読書による自己形成を図る教養の過程であり、安倍能成や阿部次郎が一高で論じた「人格の修養」でもある。ところで、安倍、阿部のいわゆる「人格の修養」すなわち（教

養》が、筒井などの学者によって修養と「同質的なものとして成立した」⁶³と考えられたのは、修養と〈教養〉と、自己形成という目標が一致しているためである。

明治末期の和辻哲郎と安倍能成、大正初期の谷川徹三らは、〈教養〉を通して煩悶から解脱した。しかし、〈教養〉は煩悶解脱の唯一の方法ではない。藤村操の親友で個人主義の支持者である藤原正は、仏教への求道および仏教的修養を通して煩悶から解脱した。藤原正は操の自死に大きなショックを受け、日々さまよっていた。『校友会雑誌』で、藤原は近角常観宛の書簡の形を借りて操の自死の後の精神状況を告白し、「一度は天地を呪咀して、魔軍に投ぜむと欲せしまでに墮落致せし、煩惱の塊、罪惡の首が、有難や、撰取の光明に照されて、大光の撰護に與かること、誠に誠に、神変不思議の奇跡に候はずや。濁惡不善、罪業深重の我身、一朝にして地獄を脱し、如来の愛児と、相成り申候こと、遍に遍に無限矜哀大慈大悲の引接と深く深く感激致し申候」と、念仏から啓示を受けたことを告げた。藤原は修養という自己形成の方法の一つである、新仏教に従って立ち直ったのである。また、個人主義受容史における重要な主張者である魚住折蘆は、キリスト教思想と仏教思想とを融合して新しい形の宗教を作ろうとした。藤村操の自死に対して理解を示す折蘆は、藤村操が自殺した三カ月後、「懷疑も不安も僕の全人はこの滔々として有無を洗ひ去る博愛の感情の大いなる流の中に没し

去った」⁶⁴と述べ、煩悶から解脱したと考えられる。彼も宗教を通して個人形成を遂げたのだろう。以上から、修養は「人格の修養」(後の教養)とともに、個人主義の受容の副産物である煩悶から解脱する道として、一九一〇年前後に有効だったと考えられる。

右の一高生の言説の分析によって、明治末期から大正初期まで、個人主義の影響下で自己形成を目指すエリート青年が煩悶・〈教養〉・修養の入り混じった状況にあったことがわかった。なお、〈教養〉という言葉が旧制高校の学生の間で大正期に浮上することは、欧米文芸の受容と関係があり、その直接的な原因は一九〇六年から一九一三年まで一高の校長を務めていた新渡戸稲造にあると考えられる。「彼は学生に多くの思想家・文学者・著名人の著作、なかんずく欧米人のそれを次々と紹介して読書することをすすめる」とともに、カーライル『衣服哲学』をはじめゲーテ『ファウスト』、ミルトン『失楽園』、ダンテ『神曲』等を講じた」⁶⁵ことにより、多くの一高生を魅了した。これらの学生のなかには、和辻哲郎や野上豊一郎などのような、西洋の文芸と文化に精通した、後に教養主義者と呼ばれた学者がいる。谷川徹三は新渡戸が一高を離れる一九一三年に入学し、新渡戸の教えに直に接したことはないが、新渡戸以来の読書習慣や一高の気風は谷川に影響を及ぼしたと考えられる。

おわりに——修養、〈教養〉、煩悶青年と個人主義との関係の再考

筒井清忠は修養と煩悶青年を対置させ、そして明治末期に〈教養〉が修養に内包されていたと見る。それに対して、個人主義の高揚が主体的な思考をもたらし、その思考過程において煩悶が生じ、修養も〈教養〉も異なった煩悶脱出・主体形成の方法であるという見地からすれば、明治末期に一高に在学していた藤村操、藤原正、魚住折蘆、安倍能成、阿部次郎と大正期在学の谷川徹三とを、個人主義の受容という一つの〈系譜〉のなかにある二つの〈系列〉として捉えることができる。個人主義という風潮の下、青年は主体的〈個人〉の形成を目指し、内観していた。藤村操は「信仰はほしいが得られぬ⁸⁸」と言い、宗教に救われる可能性を拒否し、「人生不可解」の言葉を残して死を選んだが、同時代の一高生である藤原正、魚住折蘆や阿部次郎、安倍能成も操と同様な煩悶を抱き、それぞれ宗教の修養運動と読書〈教養〉によって解脱を得た。煩悶青年という現象は大正初期まで続いていた。操の九歳下の後輩である谷川徹三は、人生煩悶のため自殺を考え、放浪した。結果的・思想的に見れば、谷川を含め、阿部次郎や安倍能成などの青年が読書を通して主体的〈個人〉の形成を遂げた。そのため、彼らは〈教養〉の系譜に位置付けられる。一方、藤原正、魚住折蘆らも主体的〈個

人〉の形成を目指したが、念仏や祈祷のような宗教的な儀式を通して自己形成を終えた彼らは、修養の系列に位置付けられるのである。では、修養と〈教養〉の差異はどこにあるのだろうか。以上の一高生の経験に鑑みれば、修養と〈教養〉は、いかなる主体を形成すべきか、いかに主体形成をなすべきかという個人主義の受容において、同様な問題に応えようとするが、そのアプローチが異なるのである。多くの修養運動に見られる「偉人崇拜」のように、修養には理想的な人格像があらかじめ存在しているが、〈教養〉には決まった目標がなく、人々は〈自己〉を価値判断の基準にし、〈自己〉らしい人格を追求する。修養は労働や冷水浴のような肉体鍛錬と、瞑想や念仏のような精神鍛錬で理想的な人格へ近づこうとするが、〈教養〉は幅広い読書によって人格形成を目指す。

明治末期・大正初期では、〈教養〉と宗教に密接な関係があることは指摘されているが、それは右に述べたように、〈教養〉と修養が同じ目標、すなわち、個人の形成を目指しているからである。しかし、その際、青年たちは藤原正、魚住折蘆らのように〈自己〉を宗教に投げ込み、宗教から救いを得るのではなく、〈自己〉をもつて宗教から自己形成の知恵を汲むのである。谷川徹三は回想のなかで、「否定の精神からやつと脱してい」く力を、ホイットマンだけではなく、親鸞からも得られたと述べたことがある。親鸞から力を得られたことは、仏教、さらに修養運動と連想されやすいが、この

場合は「自己」をもって宗教から自己形成の知恵を汲む（教養）の経験と考えるべきである。

注

- (1) 修養と教養の概念には、通時的な意味変化が見られる。小論が扱う修養と教養は、いわゆる「修養主義」「教養主義」と同じ意味で、人間形成・人間教育の一つの様式・手段である。しかし、当時は修養主義、教養主義という言辭が使われていなかったため、小論では修養と教養を使う。
- (2) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店、一九九五年、一五頁。
- (3) 同前、三三頁。
- (4) すなわち、(一)、学校教育。学校教育は修身教育と密接に結びつき、教育勅語をはじめとする天皇制イデオロギーを大衆に浸透させるものであったことは、渡辺典子が指摘している。(二)、思想運動。清沢満之を取り上げた宮川透は、「修養」を、「自己支配」の自律的願望から他律（国家権力による強制をも含む）を排除しようとするものである、と見ているが、松村憲一は蓮沼門三の修養団をめぐる研究を通して、「修養」は「天皇制国家主義の枠内にかかえ込んで、むしろ内側からこれを積極的に支え」たものだという結論を下した。(三)、修養書。修養書は大衆を主な読者として想定しているため、啓蒙の性質が強いと王成は指摘している。渡辺典子「地域社会における青年・成人の〈教養〉と学習——埼玉県入郡郡豊岡大学を中心に」千葉昌弘・梅村佳代編『地域の教育の歴史』川島書店、二〇〇三年、宮川透「日本思想史における〈修養〉思想——清沢満之の「精神主義」を中心に」古田光・作田啓一・生松敬三編『近代日本社会思想史 II』有斐閣、一九七一年、八六頁、松村憲一「近代日本の教化政策と「修養」概念——蓮沼門三の「修養団」活動」『社会科学討究』第十九号、一九七三年、二二三—二四頁、王成「修養書における大衆啓蒙をめくって」『文学』第七卷第二号、二〇〇六年三月、六八頁。
- (5) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』、二七頁。
- (6) 魚住影雄『折蘆書簡集』岩波書店、一九七七年、五五—五三頁。
- (7) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』、五頁。
- (8) 川口さつき「明治後期における青少年の自我主義——平塚らいてうと藤村操」『ソシオサイエンス』第二十五号、二〇〇九年、六二—七六頁。岡義武「日露戦争後における新しい世代の成長 上・下」『思想』第五二—五三号、一九六七年、一—一三頁、第五二—五三号、一九六七年、八九—一〇四頁。
- (9) 高橋新太郎「谷川徹三」木俣修ほか編『現代文学講座（第八集）』昭和編 I——人と作品』明治書院、一九六一年、六八頁。
- (10) 唐木順三は〈教養〉を「自己の内面的な中心の確立、自己究明を古人の書物を媒介として果たそう」と定義し、筒井清忠は「文化の享受を通しての人格の形成」と定義した。唐木順三『新版 現代史への試み』筑摩書房、一九六三年、四四頁、筒井清忠『日本型「教養」の運命』、三頁。しかし、「享受」という言葉には、個人としての主体性が見えないと思われるので、「読書による自己形成」のように定義する。
- (11) 「夏期休暇宿題 五十の日子」は谷川徹三が旧制愛知県立第五中学校の三年生の夏に書いた作文集で、十二篇の作文からなり、合わせて八〇〇〇字弱である。作文のタイトルは順番に「帰省」「病氣」「海」「交友」「勉強」「読書」「修養」「いろいろ」「いろいろ」「以ろ以ろ」「以呂以呂」「いろいろ五」である。以下、この作文集からの引用は引用文の最後に、作文のタイトルを記す。「夏期休暇宿題 五十の日子」は、谷川徹三の郷里・常滑市の在住者を主たるメンバーとする「谷川徹三を勉強する会」に、谷川俊太郎氏が寄託している資料である。このたび、この資料を使用するにあたり、「谷川徹三を勉強する会」とりわけ会員の森下肇氏には大変お世話

になった。心から感謝する。なお、「谷川徹三を勉強する会」は「夏期休暇宿題 五十の日子」の清書作業を進め、同名の小冊子を作った。筆者は同冊子に「修養」とはなにか」について執筆した。

- (12) 唐木順三『新版 現代史への試み』、二三四頁。
- (13) 同前、一二頁。
- (14) 王成「近代日本における〈修養〉概念の成立」『日本研究』第二十九号、二〇〇四年、一一九頁。
- (15) 岩崎峰子『祇園の課外授業』集英社、二〇〇四年、二六頁。
- (16) 谷川徹三『自伝抄』中央公論社、一九八九年、三二頁。
- (17) 谷川徹三「秋より冬に」『校友会雑誌』第二四三号、一九一五年、二六頁。
- (18) 武者小路実篤『或る男』新潮社、一九二三年、復刻、日本近代文学館、一九七二年、一一八頁。
- (19) マスターベーションは前近代の中国において、「陽精」を漏すと見なされたが、禁断行為ではなかった。前近代の日本においても、日本人の「性道德」は外国人が驚くほど希薄だった。李銀河『李銀河自選集——性、愛情、婚姻及其他』内蒙古大学出版社、二〇〇六年、中村茂樹『近代帝国日本のセクシャリティ』明石書店、二〇〇四年。
- (20) 赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房、一九九九年、一二三頁。
- (21) 木本至『オナニーと日本人』インタナル出版、一九七六年、赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』。
- (22) 宮川透『日本思想史における〈修養〉思想——清沢満之の「精神主義」を中心に』、七一頁。
- (23) 広田照幸『陸軍将校の教育社会史』（世織書房、一九九七年）を参照。
- (24) 藻若豊平こと本莊可宗『高魂物語』澤藤出版部、一九二三年、一四四頁。
- (25) 谷川徹三『自伝抄』、三〇頁。
- (26) 一高の校則によれば、二年連続落第の場合は、退学処分になるが、谷川

は異なる学年でそれぞれ二度繰り返しとさえ考えられる。

- (27) 岩崎峰子『祇園の課外授業』、二二六頁。
- (28) 真野毅・谷川徹三・高橋正雄「座談会 われらが旅路に果てはなし」『朝日ジャーナル』第一二〇二号、一九八二年二月、一八頁。
- (29) 徳富蘇峰『大正の青年と帝国の前途』民友社、一九一七年、二〇頁。
- (30) この論議は「校風論議」とも呼ばれる。
- (31) 宮坂広作『旧制高校史の研究——一高自治の成立と展開』信山社、二〇〇一年、九四頁。
- (32) 蘆風生こと折蘆魚住影雄「前号批評」『校友会雑誌』第一二九号、一九〇三年十月、四六頁。折蘆は一九〇四年十二月の第一四二号に掲載された「個人主義に就て」で、「個人に意義なくんば人生意義なしとは吾人の中心的確信なり」（七頁）と宣言した。
- (33) 蘆風生こと折蘆魚住影雄「前号批評」『校友会雑誌』第一二九号、一九〇三年十月、四六頁。
- (34) 阿部次郎「理想冥搜の態度」『校友会雑誌』第一三八号、一九〇四年六月、一頁。
- (35) 安倍能成「前号批評」『校友会雑誌』第一三九号、一九〇四年十月、二九頁。
- (36) 安倍能成「個人主義を論ず」『校友会雑誌』第一四五号、一九〇五年三月、二頁。
- (37) 同前、二頁。
- (38) 同前、三頁。
- (39) 同前、四頁。
- (40) 平岩昭三『検証藤村操』不二出版、二〇〇三年、七頁。
- (41) 和崎光太郎「近代日本における〈煩悶青年〉の再検討——一九〇〇年代における〈青年〉の変容過程」『日本の教育史学』第五五巻、二〇一二年、一九～三一頁。

- (42) 魚住影雄『折蘆書簡集』、五五九頁。
- (43) 安倍能成「藤村操君を憶ふ」『校友会雑誌』第二二八号、一九〇三年六月、七一頁。
- (44) 稲垣真美『旧制一高の文学』（国書刊行会、二〇〇六年）も当時の一高生が藤村操の死について、肯定的に論じていたことを指摘する。
- (45) 藤村操の自殺の原因については、失恋説や借金説など、多くあるが、定説はいまだにない。ただし、人々が追究してきたのはすべて、自殺の直接的な原因で、それらの直接的な原因の根底には、煩悶としか言いようがない伏線がある。
- (46) 谷川徹三『自伝抄』、三三三頁。
- (47) 谷川徹三「人間であること」毎日新聞社、一九七二年、五五頁。
- (48) 碧海寿広「仏の語り方の近代——近角常観を中心として」『宗教研究』第八五巻四号、二〇一二年、一五五頁。
- (49) 谷川徹三『展望』三笠書房、一九三五年、三七六頁。
- (50) 谷川徹三「有島武郎氏とその周囲」武者小路實篤ほか『わが師わが友』筑摩書房、一九四二年、二六三頁。
- (51) 谷川徹三「ホイットマンの草の葉」『高校時代』一九五六年三月号、六五頁。
- (52) 谷川徹三「否定・肯定」『校友会雑誌』第二六八号、一九一七年、一六頁。
- (53) 谷川徹三「ホイットマンの草の葉」『高校時代』一九五六年三月号、六四頁。
- (54) デビッド・フリードマン著、井上廣美訳『ペニスの歴史——男の神話の物語』原書房、二〇〇四年、一三八〜一四三頁。
- (55) 谷川徹三『自伝抄』、三三六頁。
- (56) 谷川徹三「有島武郎氏とその周囲」、二六七頁。
- (57) 同前、二六七頁。
- (58) 有島武郎『有島武郎全集 第七巻』筑摩書房、一九八〇年、五八頁。
- (59) 谷川徹三『自伝抄』、四八頁。
- (60) 谷川徹三「否定・肯定」、八頁。以下の「否定・肯定」の引用は、頁数を引用の最後に記す。稲垣真美『旧制一高の文学』（国書刊行会、二〇〇六年）も谷川の『校友会雑誌』における文学・哲学の試作を取り上げたが、谷川の煩悶期を無視したため、内面的な成長史という文脈において読むチャンスを逸した。
- (61) 谷川は最初の詩や歌を除く、「否定・肯定」までの文学の試作ですべて、草野牛郎というペンネームを使っていた。
- (62) 稲垣真美「一高『校友会雑誌』通史（論説・創作等）」『DVD版近代文学館8『校友会雑誌』別冊』日本近代文学館、二〇〇六年、一一二頁。
- (63) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』、三三三頁。
- (64) 藤原正については詳しい資料が残されていない。一九一九年、安倍能成とカントの『道徳哲学原論』を訳し、岩波講座哲学や世界思潮の執筆にも参与、一九二四年の時点で旧制忠海中学校（現広島県立忠海高等学校）の校長を務めていた。
- (65) 藤原正「呈近角先生書」『校友会雑誌』第一四四号、一九〇五年二月、三〇頁。
- (66) 魚住影雄『折蘆書簡集』、五五九〜五六〇頁。
- (67) 菅井風展「明治後期における第一高等学校学生の思潮」坂野潤治ほか『資本主義と「自由主義」』岩波書店、一九九三年、一七二頁。
- (68) 魚住影雄『折蘆書簡集』、五五九頁。
- (69) 手戸聖伸「旧制第一高等学校における〈教養〉と宗教——明治後期から大正期を中心に」『東京大学宗教学年報』第十七号、二〇〇〇年、九三〜一〇六頁。

参考文献

渡辺かよ子『近現代日本の教養論 一九三〇年代を中心に』行路社、一九九七年

進藤咲子「教養」の語史』『言語生活』第二六五号、一九七三年、六六～七四頁

瀬川大「『修養』研究の現在」『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室 研究室紀要』第三十一号、二〇〇五年、四七～五三頁

齋藤勝「昭和十一年における〈教養〉論議の諸相——哲学者・大正期文学者・日本浪漫派の視点から」『東洋大学大学院紀要』第四十六号、二〇〇九年、五三～六六頁

平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌』新曜社、二〇一二年